

小学校の先生方にも知ってほしい

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」



今、話題の「架け橋期（5歳児から1年生の2年間）のカリキュラム」は、幼保小の先生が協働し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を手掛かりとし、策定することとされています。そこで、改めて知っておきたい「10の姿」について確認しましょう。【参考】令和4年3月31日 文部科学省 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）

Q1

「10の姿」とは、どんなものですか？

A

幼児期において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿を10個にまとめたものです。



Q2

小学校に入学してくるすべての子供がこの「10の姿」を実現しているのですか？

A

「育ってほしい姿」であって到達目標ではありません。ですから、すべての子供に同じように見られるものではありません。園では、「10の姿」を念頭に一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり、必要な援助を行ったりしています。

Q3

どうして小学校でも「10の姿」が必要なのですか？園のものではないのですか？

A

「10の姿」は幼児期においてのみ重要視されるものではなく、小学校以降の学びの基盤となるものです。例えば、保育参観や子供たちの交流といった場面で、園の先生と、小学校の先生が、「10の姿」という共通の視点に基づき、実際の子供達について語りあうことで、より具体的に子供の育ちと学びをつないでいくことができます。

例えば

幼児と児童の交流活動（七夕製作）の中にどんな学びがあるのでしょうか？

あるグループが「輪飾りをたくさんつなげよう！」と輪飾りをつなげ長くし始めた。「ぼくたち、いくつあるか数えてみたら110個もあったよ！」「私たちはもっとあるよ。あのね、歩幅で数えるといいよ。」「手を広げてみるとどのくらい分かるよ」などと長さを測る活動も見られ始めた。願い事は、児童が書いてあげるのではなく、幼児が自分で書くことができないところは児童が手伝っていた。

（参考）「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開」

「10の姿」を視点にすると、様々な育ちが見えてきますね。



思考力の芽生え？



協同性？



数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚？

check!

言葉から想起されるイメージは各々異なるので、協議の際は「項目名」だけでなく「10の姿」の「説明文（文言）」にまで着目しましょう。例えば【数量や…】では、このような姿が示されています。

【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を手掛かりに子供達の様々な育ちや学びを見取り、育まれつつある力をさらに伸ばしていくにはどうしたらいいか、園、小学校それぞれの教育を見直していくことが大切です。